

批評：ドキュメンタリー映画 「ダーウィンの悪夢」の舞台から

小川 さやか

1. グローバル化の悲劇を描いた 「ダーウィンの悪夢」

「ダーウィンの悪夢」は、オーストリア人の監督フーベルト・ザウパー氏によって、2004年に制作されたドキュメンタリー映画である。本編では、アフリカ最大の湖、ヴィクトリア湖にナイルパーチという外来の巨大魚が放されたことによって引き起こされたとされる、以下のような悲劇の連鎖が扱われている。

ナイルパーチは、かつて「ダーウィンの箱舟」と呼ばれた湖の豊かな生態系を破壊しながら、湖畔地域にEU諸国・日本などへ輸出する一大魚加工産業を生み出した。しかし豊かになった人々は、アジア系工場経営者などに限られ、アフリカ系漁師や労働者は貧困に喘ぐ。そして漁師や輸出を担う東欧諸国のパイロットを相手に売春婦が集まり、エイズが蔓延し、ストリートチルドレンが増加する。また現地では飢饉が発生しており、工場から廃棄された「あら」や骨身が食用として販売

されている。さらにナイルパーチを輸出する飛行機でアフリカの紛争で使われる武器が密輸されているという疑惑が持ち上がる。

この映画は オスカー賞にノミネートされたほか、日本をふくむ各国で賞を獲得した。おそらく、勝俣[2007]が「資源供給地としてのアフリカ」「内戦が継続する背景」「生命再生産の危機」という三つの観点から評価したとおり、「グローバル化の中の『南』の現実を高度に抽象化した表象」が、「北」の人間に衝撃を与えるものだったからであろう。

しかし、この映画に対する反応と現地の批評は、良いものではない。ヨーロッパでは、ナイルパーチが悲劇の根源と解釈され、この魚の不買運動が起きた。一方、タンザニアでは、キクウェテ大統領をはじめ各省庁の役人らが「この映画は、タンザニアの優れた国際的イメージと漁撈産業にダメージを与える悪意ある作品だ」という主旨の抗議声明を発表した。そして武器密輸や「住民が骨身しか口にできない」ことを否定するための根拠（近隣諸国の平和創出に向けた政府の取り組みや魚産業の

雇用創出効果など)が、連日、新聞各紙やラジオで報道された。映画の舞台となったムワンザでは映画に対する抗議デモが起き、撮影に協力した人々は警察に身柄を拘束されたり、嫌がらせを受けた。

ところが、映画の公式ホームページによると、これらの反応に対するザウパー氏の見解は、「不幸な誤解」というものだ。「これは魚の映画ではなく……タンザニアの人々は、実際に映画を見たわけではないので、デモは大統領らによる扇動の結果」という主張である。

たしかにムワンザの住民たちの大半は、この映画を見たことがない。多くの住民は、メディアを通して、映画の断片的な写真やキクウエテ大統領らが議論している内容を見聞きしているだけである。しかし現地の人々の批判を、はたしてザウパー氏の言うように「不幸な誤解」として片づけていいものかは再考を要する。本論では、「ダーウィンの悪夢」の舞台となったムワンザの人々の批評を検討することを通して、この映画の物語性と製作手法が内包する問題点を指摘したい。

2. グローバル化の物語に回収できないローカルな問題群

まず、ムワンザ市の人々によるこの映像作品に対する批評を理解する上で象徴的なエピソードを二つ紹介したい。

最初は、わたしが調査対象としている古着商人から映画のストーリーを聞かれ、説明したときのことである。このとき、商人たちから発せられた第一声は、「なんだ、それじゃあ、パンク屋が儲かるという話と同じじゃないか」というものだった。パンク屋が儲かる話とは、しばらく前に商人のひとりが、次のような言葉で、仲間に新たなビジネスを始めようと投資を募り、拒否された話である。

「イラク戦争の影響で、石油価格は上昇する。すぐに困るのは、シティ・バスの運転手とコンダクターだ。なぜならバスを所有するボスは以前と同じ『あがり』を請求するが、客は乗車賃を上げることに抵抗するからだ。その結果、運転手たちは、バスにますます多くの客を詰め込んで、猛スピードで1日に何度も路線を往復するようになる。すると道路は穴だらけになる。穴だらけになった道を走ると、パンクが増える。だから停留所でパンク修理の機材をもって待っていたらきっと儲かる」

しかし実際には、多くの乗客は新しい運賃を支払い、行政によって道路が舗装されたため、パンクの多発は起きなかった。彼らはこの結果を知っているので、この第一声は「この映画の筋立てはこじつけだ」と痛烈な批判を投げかけたに等しい。

もうひとつのエピソードは、わたしが、ある路線でバスの乗車賃が値上がりしたことを知らず、「外国人だって、乗車賃くらい知っているわ」とコンダクターに突っかったときのことである。このとき、わたしは隣に座っていた女性から「あら、あなたは外国人のくせに、ウタンダワジ (utandawaji: グローバリゼーション) のせいで運賃が上がったことを知らないの」と諷められた。意図が呑み込めなかったわたしに、若い男性客は笑って、「あんたたちは、俺たちが骨身 (マパンキ: mapanki) を食べるのも、貧乏なのも、みんなグローバル化のせいにしているじゃないか」と補足した。

すでに述べたようにムワンザの人々の多くは直接的に映画を見ていない。そのため彼らの映画評は、映画の全体像に関するものというより、センセーショナルな場面や、武器密輸、環境破壊、売春婦・ストリートチルドレンの増加といった個別のテーマに関する事実関係の細かな修正や反論で占められていた。



しかしこうしたエピソードに遭遇するうちに、ムワンザの人々は、けっして細部に固執して映画の全体的なテーマや意図を理解していないのではなく、むしろこの映画が伝えようとしている明確なメッセージを正しく読み解いた上で、なぜこれらのローカルで複雑な問題群が、ひとつの映画において単一の物語としてまとめあげられているのかにこそ疑問を呈しているのではないかと考えるようになった。

ムワンザの人々にとって、この映画に詰め込まれた「湖水汚染」「アジア系経営者との格差」「売春婦やストリートチルドレンの増加」「骨身の販売」といった問題群は、それぞれ個別の問題である。これらは、政治経済的な問題であると同時に、民族間の文化的差異や倫理的・宗教的問題、家族関係の変化、果ては個人的な資質など、さまざまな要素が絡み合った問題である。そのため彼ら自身は大局的なグローバル化の物語に回収しきれない具体的な事象を常に発見してしまう。例えば、「売春婦が1日10ドルも稼げるのであれば、売春婦じゃない貧乏人が存在するのはなぜか」「ストリートチルドレンの親の多くは生きているし、彼らを支援する施設も多い。それでも路上で暮らすのはなぜか」という類の疑問はシンプルだが、その答えは多様に想定し得るものだ。

またムワンザは、ヴィクトリア湖上交易の玄関口としても、タンザニア有数の綿作地帯や金鉱を擁することでも商工業の発展を牽引してきた都市であり、複雑な労働移動をナイルパーチだけに端を発するものと説明するのは困難である。

したがって、「ダーウィンの悪夢」をめぐる噴出した現地の人々の抗議は第一に、安易に因果関係を説明する装置となり得る、すべての近代化やグローバル化をめぐる言説にこそ向けられたもののだといえるだろう。この点をまず押さえておきた

い。

3. 生活世界における「現実の縮図」と「グローバル化の縮図」との差異

おそらく大統領らによる「扇動」がなくとも、この映画は国民感情を傷つけるものであった。なぜなら、この映画は「グローバル化の縮図」を端的に示すものであったとしても、ムワンザの多くの住民が、自らの生きる「現実の縮図」と考えるものからはかけ離れているからである。

ムワンザの多くの住民は、貧者が「たまに」骨身を食べていることや、湖畔の漁撈キャンプがエイズ蔓延の「ひとつの」拠点であることを認めている。そしてそのような現実を、政府が魚産業の雇用創出効果の陰に、タンザニアの「恥部」として隠蔽しようとするのはおかしいと語る傾向にある。その上で、彼らはやはりザウパー氏の表現の仕方は、偏狭で過剰だと認識している。例えば、それは次の言葉に象徴されている。

「わたしたちは、ホスピタリティーに富んだ国民だけれども、この監督は家に招待したくないわ。だって、彼はきっと、肉のスープでもてなしても、副菜として添えた野草だけに注目して、わたしの料理がとても貧しいものだったと文句を言うに違いないから」(26歳、女性、2006年8月)

この発言を、表現の自由に対する無理解や「作為と演出の混同」として解釈してはならない。この映画には、ザウパー氏による誤解やスワヒリ語の不適切な解釈が散見されるが、これらの点に関して一般の人々は、海外の批評家や政府のようにすぐさま「捏造」や「プロ意識の欠如」と非難するわけではなく、「外国人だから仕方ない」とずっと寛容な態度をとる傾向にある。むしろ、普通

の外国人が意図的に制作した作品だと理解しているからこそ、彼を快く歓迎した自分たちが誇りに思っている平和的な国民性や豊かな自然、食文化、困難を生き抜く工夫からは何も学ばず、まるでこれらの悲劇の生産に無関係な観察者として偏った表象をしたことに、憤りや無念さを感じているのだという印象を受ける。

そのため、人々の批判のあり方には、二つの傾向がみられる。ひとつは、自らの主体性や友愛の精神の過度な強調である。「ダーウィンの悪夢」をめぐる頻繁に聞かれた言説に「タンザニアには飢餓で死ぬ人間はいない」「タンザニアはアフリカでもっとも平和な国だ」というものがあつた。もちろん事実と照らせば誇張だが、これらの言葉は映画において一元的に悲劇的・受動的に描かれた他者表象を、同じレベルの過剰性で、一元的に豊かで平和的な自己表象へと裏返してみせるためのものである。もうひとつは、悲劇の過剰な剥ぎ取り方に紛れもないビジネス性を感じとる傾向である。

次節では、この自己表象の問題とビジネス性の2点を切り口に、第2節で述べた不可解な「グローバル化の物語」とその顛末が、いかに納得されていくかを検討したい。

4. よくある不可解な顛末

二重の「他者」像をめぐる

「俺たちムワンザの人間はマパンキ(骨身)を食べるが、ダルエスサラームの人間も、鶏の黄色い足や牛の踝のスープを飲む。だからマパンキが、そんなに珍しいはずはないさ」(30歳、男性、2006年8月)

これは、貧困が遍在することを告発するための言葉ではない。この言葉は「なぜこの映画に拘泥するのか疑問だ」という前提の上で、この映画に

過剰に反応したダルエスサラームの人間、すなわち政府を皮肉って発せられたものである。

この映画は、撮影に関与した人々への嫌がらせだけでなく、ムワンザの人々にとって不可解な事件を数多くひき起こした。例えば、武器を隠し持つ強盗団を探しているとして失業層の不当逮捕がおこなわれたり、アジア系経営者とアフリカ系労働者との関係が悪化したり、「マパンキの販売は、違法の蒸留酒(*gongo*)の販売と同じである」との新聞記事に反応した人々が、骨身を焼き捨てたり、といったことである。

しかし多くの人々にとって、これらの事件は、不合理だが目新しいものではない。過激な報道の後によく起きる不合理な事件に「今回は映画が加担した」にすぎない。例えば、古着商人たちは「マパンキを売ってはいけないというのは、古着を売ってはいけないというのと同じ不合理な論理」(男性、34歳、2006年8月)と説明している。

ムカパ前大統領は、2003年に、中古下着はタンザニアの品位をおとしめ、感染症を拡散する可能性があるとして、その輸入を禁止した。つづく2005年には、国内衣料産業の保護・育成のため、古着の輸入税が引き上げられた。しかし、衣料産業がほとんど育っていないタンザニアにおいて、古着の規制は貧者にとっては生活を逼迫させる不合理なものであった。彼らは、魚の骨身を「世界システム」の構造的な矛盾として似通った古着になぞらえたのだが、しかし真の皮肉は、同じ恥部でも「下着も古着」という事実は、政府自ら公表したではないかということだ。同様に「湖畔のエイズ問題を政府が隠したことなどない」。そのため次のような言葉も囁かれる。

「キクウェテ大統領の人氣は、ソーダの瓶だって言われている。勢いよく泡がのぼるのは最初だけで、気が抜けた後は甘ったるい



液体が残るだけだ。あの監督は、大統領に（スケープゴートとして）体よく使われたんだ。でもあの白人はタンザニアを利用して儲けたのだから、どっちもどっちだ」（男性、38歳、2006年8月）

これは風刺のレトリックである。要するに人々にとってこの映画に対する政府の過剰反応は、取り締まりの理由探しや、援助機関・諸外国政府との駆け引きにおいて、「困難な現実直面する」と「着実な発展を遂げる」という二つのタンザニア・イメージの間で自己表象を都合よく転換する政府がよくやることなのである。誤解のないように言えば、政府のイメージ戦略は、人々にとってまだ共感し得るものだ。政府は、圧倒的に不均衡な力関係の下で、どちらか一方のイメージを生産し、押し付ける西欧人に応答しているにすぎないからだ。しかし彼らは、どちらも現実の意図的な誇張である以上、真の貧者には何も現実的利益をもたらさない「遠くの他者と近くの他者とのビジネスにすぎない」ととらえているようである。

不運な協力者たちは、ザウパー氏をそのような外国人のひとりと認識して、サービス精神を発揮してしまったのであり、彼らを心底「捏造の共犯者」として弾圧するような非民主主義的な雰囲気は、一般市民だけでなく、政府にもない。これは例えば議会に召喚された協力者が、議員から「計画の駒にされただけ」という理解を得たことから明らかであろう。

5. 映像世界におけるグローバル化の暴力

わたしには「声なき人々」を受動的かつ平板に描き、地域の複雑性に照らして検討すべき問題群をひとまとめにして、遍在するグローバル化の悲劇として提示することが、価値あることには思え

ない。これまで検討してきたように、現地の人々は便利な言葉こそ使わなくても、グローバル化の実体も、そのような物語を生産し、喧伝する西欧人の罪悪感や驕りにも気づいている。悲劇的なアフリカや、その鏡像としての豊かなアフリカという語り口が、しばしば政治的に利用されたり、西欧人による不可解な運動をひき起こし、結局、歓迎せざる結果を招くことに無自覚なのは、けっしてアフリカの人々ではないのである。

またこの映画は、「賢くて親切な」インフォマントの言葉を、コンテキストから切り離してつぎはぎすることが、いかなる問題をひき起こすかを如実に示す事例となった。少なくともドキュメンタリーと銘打つ以上は、自らとは異なる考えをもっているはずのインフォマントとの不均衡な力関係を自覚し、物語作りの「共犯にしない」誠実さを持ちあわせるべきである。

この映画が招いた「不幸な誤解」は、あらゆる「練りあげられた」グローバル化言説自体が再帰的に生み出しつづけている、多くの必然的な悪夢のひとつである。ザウパー監督は、同じ物語をあらゆる「南」で別の資源を題材に製作できると豪語する。しかし、それは彼の映像世界においては、欧米出自の価値基準や観点からローカルな価値や問題を一元化し、それによって差異化や周縁化を生じさせるというグローバル化の暴力が、「北」の人間のためだけに肯定されているに等しいのではないだろうか。

【参考文献】

勝俣誠 [2007]「ドキュメンタリー映画『ダーウィンの悪夢』は、「北」の私たちを不安にさせる」(『論座』2月号) pp. 93-100。

(おがわ・さやか /
日本学術振興会特別研究員・京都大学大学院文学研究科)